

平成30年度 熊本県立劇場文化活動支援事業

# ザ・シンフォニエッタ

## 第31回演奏会

### 31st Concert



指揮  
松元 宏康



ヴァイオリン  
柴田 恵奈

2018年10月14日(日)

熊本県立劇場コンサートホール

開場13:45 開演14:30

ゲストコンサートミストレス 船津 真美子



撮影：ユーツークラシカルレコーディング

主催：ザ・シンフォニエッタ

後援：熊本県教育委員会 熊本市教育委員会 熊本日日新聞社 RKK TKU KKT KAB FM791 FMK

公式ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>





指揮 松元 宏康 *Hiroyasu Matsumoto*

東京都生まれ。幼少よりピアノ、エレクトーンを学び、洗足学園音楽大学ならびに同大学附属指揮研究所マスターコースを経て、仙台フィルハーモニー管弦楽団副指揮者に就任し、プロ指揮者としてのキャリアをスタートさせた。これまでに仙台フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団、群馬交響楽団、千葉交響楽団、広島交響楽団、日本センチュリー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、オーケストラアンサンブル金沢、東京佼成ウインドオーケストラ、シエナウインドオーケストラなどへ定期的に客演し、年間のコンサート出演は70公演以上を数える。指揮法を秋山和慶、河地良智、増井信貴の各氏に、スコアリーディングを島田玲子氏に、クラリネットを松代晃明氏に師事する。現在、琉球フィルハーモニックオーケストラ正指揮者、ブリッツフィルハーモニックウインズ音楽監督、洗足学園音楽大学講師。(コンサートイマジン所属・東京都在住)

ヴァイオリン 柴田 恵奈 *Ena Shibata*

熊本市出身。ヴァイオリンを廣瀬卓、木野雅之、細野京子の各氏に師事。室内楽を藤原浜雄、徳永二男、エマニュエル・ジラルール、山口裕之、若林顕、小澤英世、久保田巧の各氏に師事。ピアノを藤本史子、ソルフェージュを篠原恵理、春日信子の各氏に師事。イヴリー・ギトリス、ハビブ・カヤレイ、エンリコ・オノフリ各マスタークラスを受講。熊本、東京、神奈川、京都を中心にリサイタル、室内楽コンサートをおこなうほか、スコットランドDG地球救援音楽祭、みやこじま青少年国際音楽祭に出演。



2009年、第2回国際ジュニア音楽コンクールin千葉にてサラサーテ賞受賞。2012年、木野雅之マスターコンクールin合歓の郷にて第1位。2016年5月、紀尾井ホールにおいて「熊本地震 復興支援チャリティ・ガラコンサート」に出演。同年10月、「中丸三千繪スペシャルリサイタル」に出演。2017年3月、第11回セシリア国際音楽コンクール第4位。同年9月、フィルハーモニックオーケストラ長崎定期演奏会にてソリストを務めた。同年10月、第18回大阪国際音楽コンクール入選。第2回スペイン音楽国際コンクールにおいてスペイン大使賞受賞。

ルーテル学院中学、桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学を本年3月に卒業。



ゲストコンサートミストレス 船津 真美子 *Mamiko Funatsu*

相愛大学音楽学部卒業、研究生修了。第6回日本クラシック音楽コンクール大阪大会奨励賞、全国大会入選。グレゴール・ブーロ、里屋智佳子、小谷公子、木野雅之の各氏に師事。ベルリンにてレオン・シュペラー氏にレッスンを受ける。大阪交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団ほか、日本各地の主要オーケストラで、オーケストラ客演奏者として活動。2016年まで在住したタイでは、バンコク交響楽団にてオーケストラ奏者として演奏、自身のリサイタルも開催。第4回熊本アートフェスティヴォ!聴衆賞受賞。必由館高校非常勤講師、平成音楽大学演奏員。日本演奏連盟会員。

管弦楽 ザ・シンフォニエッタ *The Sinfonietta*

1986年に結成された小編成のアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心としながら、ロマン派、近代の曲なども演奏している。アンサンブルを楽しむため、小編成(50人以下)の特性を活かした選曲、演奏活動をしている。

これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二、山下一史、岩村力、藤崎凡、久保田悠太香、船曳圭一郎、萩原勇一、藤崎奈美などの各氏、ソリストでは安永徹(Vn)、堀正文(Vn)、篠崎史紀(Vn)、小野富士(Vla)、O.ボルヴィツキー

(Vc)、小林道夫(Cemb)、若林顕(Pf)、合志知子(Pf)、吉田秀晃(Pf)、青柳晋(Pf)、鈴木理恵子(Vn)、龍野しずく(Vc)、田尻大喜(Tp)などの各氏で、すばらしい指導者・共演者に恵まれ充実した活動をしている。

2011年10月に若林顕氏の弾き振りでピアノ協奏曲3曲を一夜で演奏。また2012年9月には特別演奏会として歌劇「カルメン」演奏会形式に挑戦。山下一史氏指揮のもと県内外の歌手の方々と共演。合唱団も一般から募集し、初のオペラ演奏会は好評を得た。2017年には、ソリストに日本を代表するヴァイオリニストの鈴木理恵子氏とNHK交響楽団首席チェリスト藤森亮一氏を招き、名曲と言われながら実演ではあまり聴く事のないブラームスのドッペルコンチェルトを共演。第30回の節目にふさわしい演奏会となった。

ザ・シンフォニエッタはこれまでに培われた丁寧な音楽作りを心掛けながら、更なる歩みを進めている。



撮影：ユーツークラシカルレコーディング





## ●モーツァルト／歌劇「劇場支配人」序曲 K.486

——なぜ今回、一曲目にこの曲を選曲されたのですか？

松元さん：指揮のお話をいただいたときに既にメンデルスゾーンとベートーヴェンが決まっていたので、さっと聴けるこの曲を選びました。

——スピード感ありますよね、風のような。

松元さん：例えば家に人を呼んでね、前菜からそんなに気合い入れたら大変じゃないですか！だから「あー、おいしかったね。次は何？」って持って行ける導入としてこの曲を提案しました。

——そういう意味では今回のプログラムはいい流れになっていますよね。

松元さん：そうですね。マニアも惹きつけて、知らない人もなんとなく聴けて。劇場支配人って4分くらいで終わるから、クラシック音楽を日頃聴かない人はこう思うと思います。「ああ、良かった。これぐらいで終わった～！(笑)」。そしてなんとか一曲目を乗り越えたら、若いヴァイオリニストが出てきて音楽もキャッチーで。それから3曲目のメインディッシュが登場する、という流れです。美しいプログラムですよ。

## ●メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

——ずばりこの曲の聴きどころは？

松元さん：なんといっても(柴田) 恵奈さんのソロですよ。すごく清潔感があって素晴らしい。よく勉強もされている。この曲は小学生でも弾くことができますが、音楽的にどう昇華していくのかというのは逆に難しいですね。そこをどう彼女の音楽として伝えられるかというのが聴きどころじゃないでしょうか。

——ではこの曲の魅力をお願いします。

松元さん：(開口一番)いい曲!!

——(笑)。やっぱり名曲といわれる理由は、美しすぎるメロディーでしょうか？

松元さん：まず、わかりやすいですよ、展開が。1楽章はもやがかかったような出だしからロマンチックにソロが始まって、湧き出るようなメロディーが楽器を代えて交互に出たり、同時に出たり、ソロとの掛け合いがあったり、めまぐるしく展開していく。2楽章は完全に歌の世界。無言歌集のようなものですね。3楽章ではさらにリズムカルに色々な要素をソロパートが受け持ったり、オーケストラパートが演奏したりします。

——ところで(柴田) 恵奈さんはどの楽章が好きですか？

柴田さん：・・・2楽章。

松元さん：やっぱり2楽章だよな～。でもだからといって2楽章がこの曲の最大の聴き所かって言うと、そうじゃないよね。前後があるから2楽章が生きるんです。

——(柴田) 恵奈さん、先生からはどんなことをレッスンで言われましたか？

柴田さん：「もっと繊細に演奏しなさい」と言われました。

松元さん：難しいね。繊細だけけど1800人入るホールで響かせなくてはならないからね。

——この曲は一応、楽章はありますが、実際には1楽章と2楽章はつながっているし、3楽章も入り口が変わっていますよね。どうしてなのでしょう？

松元さん：思ったままに最初から最後まで一気に書いているからでしょうね。それはメロディーメーカーに多いスタイルかも。一筆書きのようなものでしょうね。

## ●ベートーヴェン／交響曲第2番 二長調 作品36

——ベートーヴェンの交響曲第2番はとてもよい曲なのに、比較的演奏される機会が少ないのはなぜでしょうか？

松元さん：単純にインパクトのある曲に挟まれているからだだと思います。1番は最初に書いたバイタリティーあふれる交響曲で、3番の交響曲は古典派からロマン派へ移るきっかけになった曲なんですよ。そんな1番と3番の間にはさまれた曲なので目立ちづらい。でも実は2番は1番よりもさらにアイデアを練って掘り下げていった面白い曲なんです。2番を書いているときに耳の不調を感じ始めて、彼はその後に遺書として伝えられる有名な手紙を書きます。ちなみに、これはハイリゲンシュタットの遺書と呼ばれる手紙ですが、これは遺書ではありません。で、その時期はまさに彼にとって劇的な変化の時代なんですよ。その夜明け前みたいな時期にかかれたのがこの2番なんです。



——ところで練習の時、「モーツァルトやメンデルスゾーンはメロディーメーカーで天才だったけど、ベートーヴェンは音楽を構築していく才能がすごかった」と話されたのが印象的だったんですけども。

松元さん：人は作曲家っていうと、天から何か降ってきてサッと書いてしまうイメージがあるかもしれないけれど、それは一部の作曲家。ベートーヴェンは全然メロディーメーカーではないんです。ある素材を構築していくのが天才的にうまかった。この曲ほど、旋律的なテーマが出てこないで、短いテーマを発展的に作っていった作品は珍しいかもしれないですね。モチーフだけを使って曲を書いてしまう。これが彼のすごいところですね。

とは言っても、フランス革命を生み出した激動の時代がなければ彼の作曲のエネルギー・作曲の経緯もなかった。そういう意味では「ベートーヴェンはその時代が生み出した」という言い方も間違いなく出来ますよね。また、人は誰も才能に恵まれていたりラッキーな境遇にいるわけではなくて、病気もすれば、つらいこともある。ベートーヴェンも私たちと同じ一人の人間として実際に生きていたわけです。でも彼がそれを努力して克服したところに音楽を通して共感を得るから、みんなベートーヴェンが好きなのではないのでしょうか。

——この曲の特徴を教えてください。

松元さん：全ての楽章において斬新。例えば1楽章の冒頭で、いきなりダブルリード4人のアンサンブルで始まる曲など当時ありませんでしたし、序奏が1番に比べてとても長くなりました。そして本来ヴァイオリンで奏でるであろう序奏のあとの主部の旋律は、ヴィオラとチェロが担当するんです。当時の人は相当びっくりしたと思います。2楽章ではクラリネットがメロディー楽器として、あんなに長く旋律を吹くというのは革新的なことでした。

——松元さんは3楽章、スケルツォの楽章が大好きと伺ったんですけど。

松元さん：交響曲というフォーマットを発展させたのはハイドン。そしてベートーヴェンはこのフォーマットを広げた人なんです。

交響曲の3楽章はそれまではメヌエットという舞曲のスタイルでした。例えばベートーヴェンも交響曲第1番の3楽章はメヌエットと書いているけれど、テンポは全然メヌエットじゃない。要するに踊りから派生した音楽をスケルツォという新しいジャンルにしまったんです。3拍子という枠の中で少ないピースを使ってパズルを展開していくというスタイルを構築しました。

これは僕の勝手な憶測なんですけど、貴族が古き良き時代にメヌエットを優雅に楽しむという習慣はきつと、民衆が「自由を勝ち取るんだ！」という時代には失われていったんじゃないかなと思うんですよ。ベートーヴェンが感情を投影する作品を書くときに、そのような優雅なものに収まらなくなっていったんじゃないのでしょうか。これはあくまで僕の想像ですけど。

——そのスケルツォである3楽章はロックのようだともおっしゃっていましたが。

松元さん：結局ロックって何かというと、反体制的な、既存のものに対して「そうじゃないだろう」という精神。ベートーヴェンは民衆が自由を獲得するという世の中の流れに敏感だった人。だから舞曲だったメヌエットがビートに訴えかける音楽に進化していったのは自然の流れだったように個人的には感じています。日本の幕末の感覚にも近いのではないのでしょうか。

——最後に、演奏会においてになられたお客様に何かメッセージをお願いします。

松元さん：このオーケストラで演奏しているメンバーは、主婦だったり、サラリーマンだったり、普段はお客さまと変わらない人達です。そのような方々が音楽が好きだという熱意で集まって、休みの日に何時間も練習して、今日大曲を3曲も演奏する。お客さまには、そんなメンバーが「色々な場面で何を生み出して見せてくれるか」というところをしっかりと聴き届けていただきたいと思います。

柴田さん：メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲はとても有名な曲で、クラシック音楽に馴染みがない方でも、曲の冒頭だけでも聴いたことがあるかもしれません。今回は全楽章聴いていただき、メンデルスゾーンの特徴であるメロディーの美しさを楽しんでいただけたらと思います。

この夏に受けたドイツでのセミナーでこの曲に取り組み、メンデルスゾーンの素晴らしさがさらに伝わるよう工夫してみました。聴いたことがある方にも新鮮なメンデルスゾーンになるような演奏をめざします。

——本日はたくさんのいいお話をありがとうございました。

